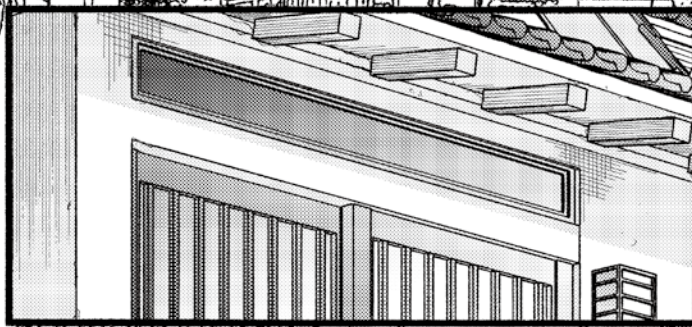


「いつか行く道」

甲府の朝は
冷え込みが
厳しい



おはよう
ございます…

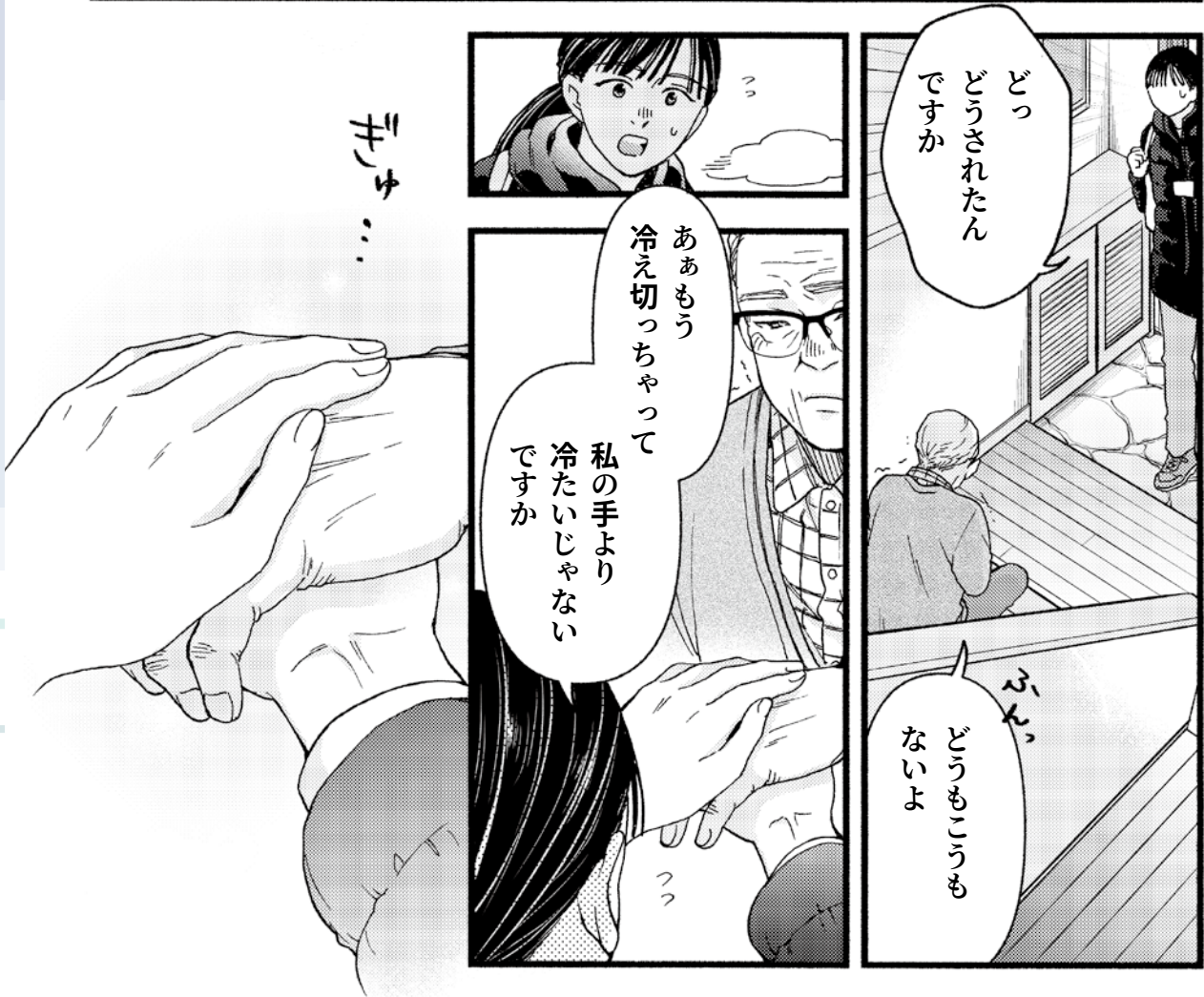
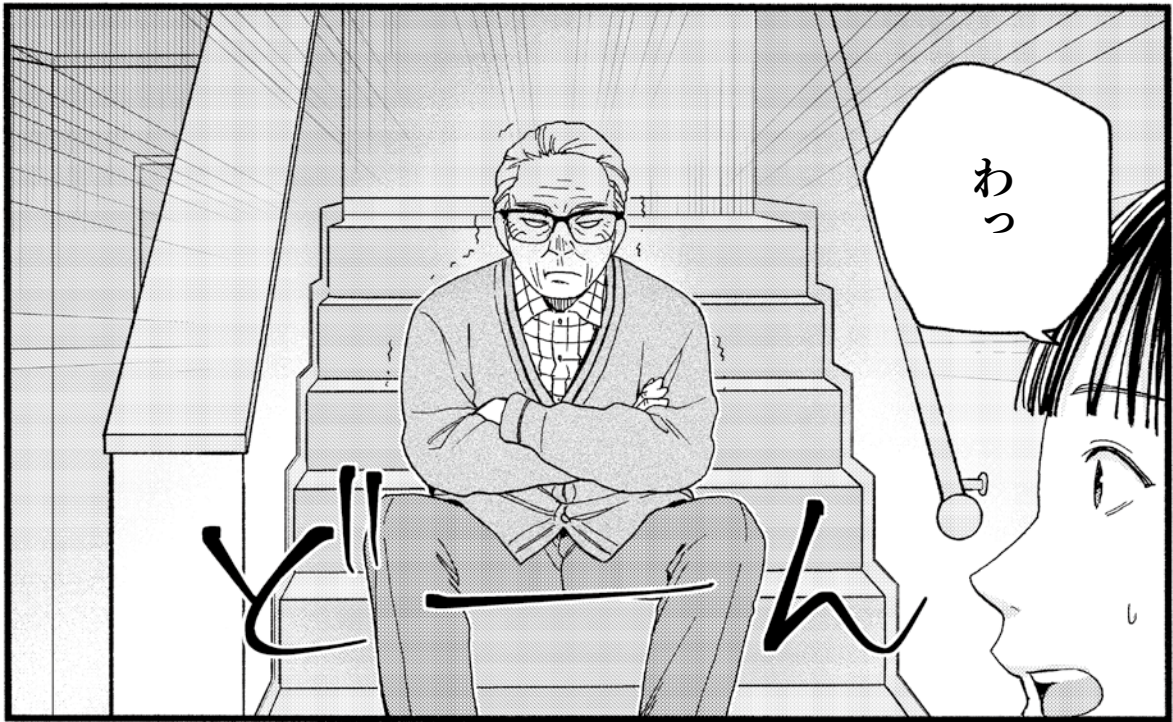
指がかじかむ
なあ

カララ…



訪問時間
10分前…

いい時間かな

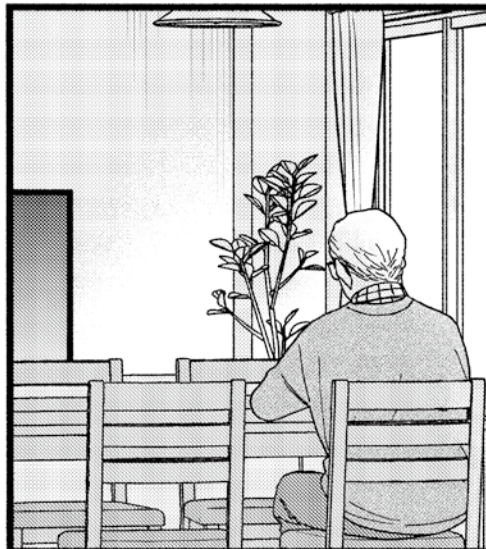




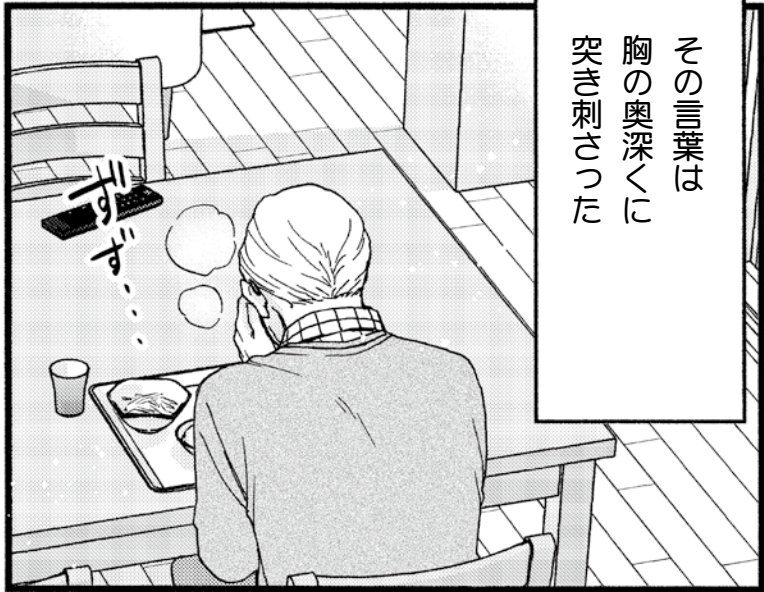
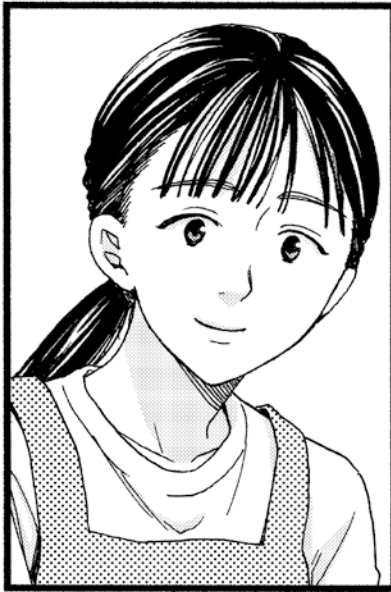
君が来なければ
この家の空気は
動かないんだ

静かな家

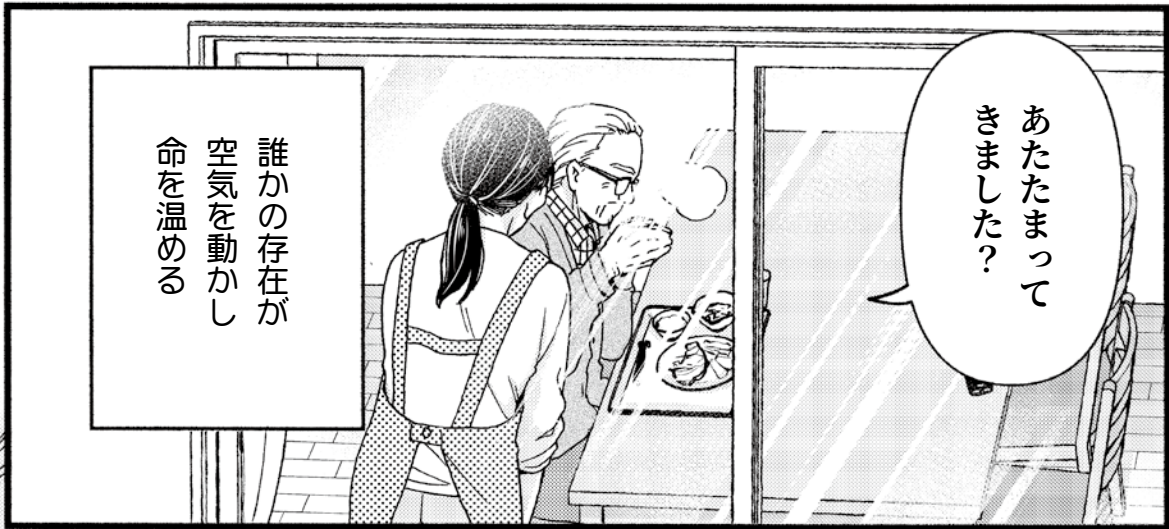
君が来なければ
この家の空気は
動かないんだ



都内の病院を
長年勤め上げ
定年後すぐ
最愛の奥様を亡くし
故郷の甲府で
一人暮らしを
続けている



その言葉は
胸の奥深くに
突き刺さった



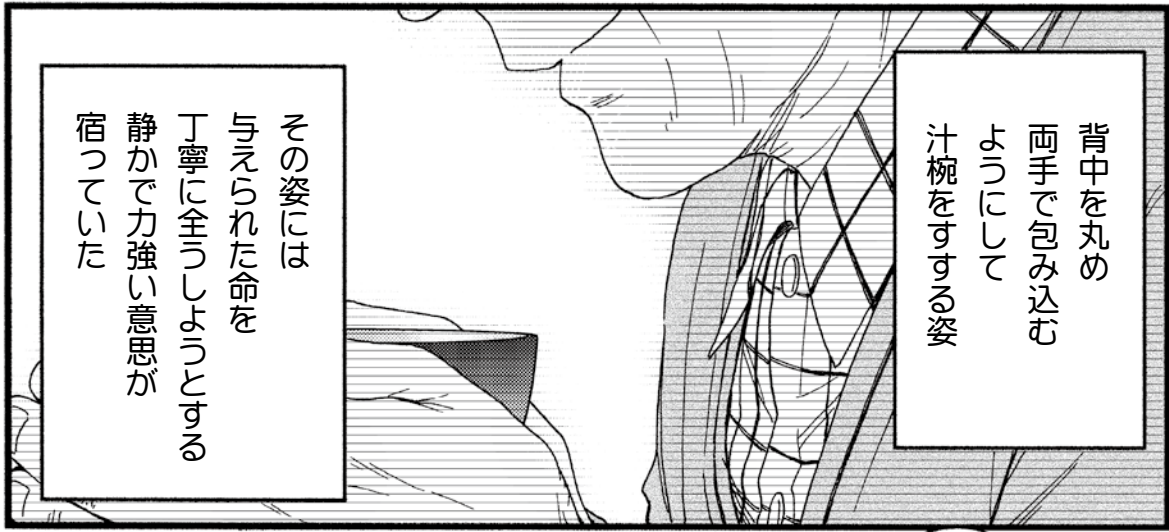
誰かの存在が
空気を動かし
命を温める

あたたまって
きましたか？



うん

そんな当たり前の
よっでいて
切実な現実が
そこにあつた



背中を丸め
両手で包み込む
ようにして
汁椀をすする姿

その姿には
与えられた命を
丁寧に全うしようにする
静かで力強い意思が
宿っていた



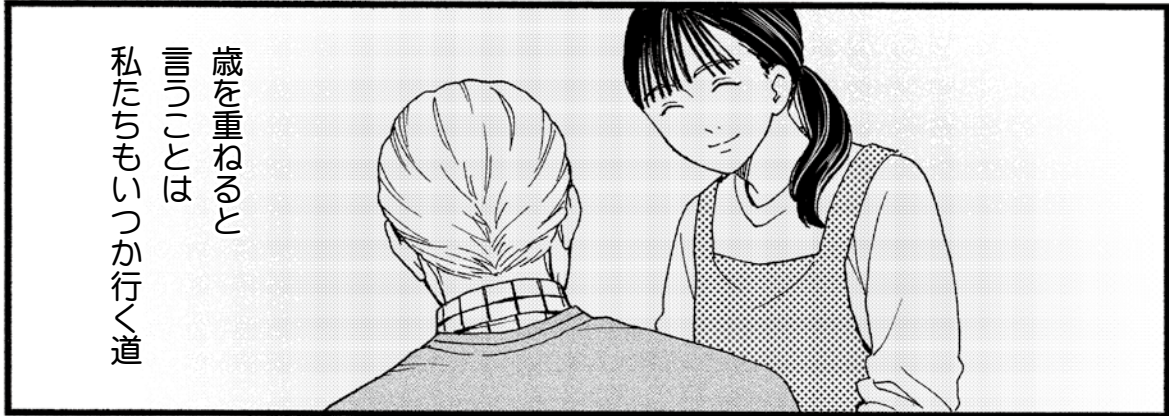
今日は
いい気候ですよ

少し外
歩きましょうか

ええ…
嫌だよ
寒いじゃないか

ええ…

あはは

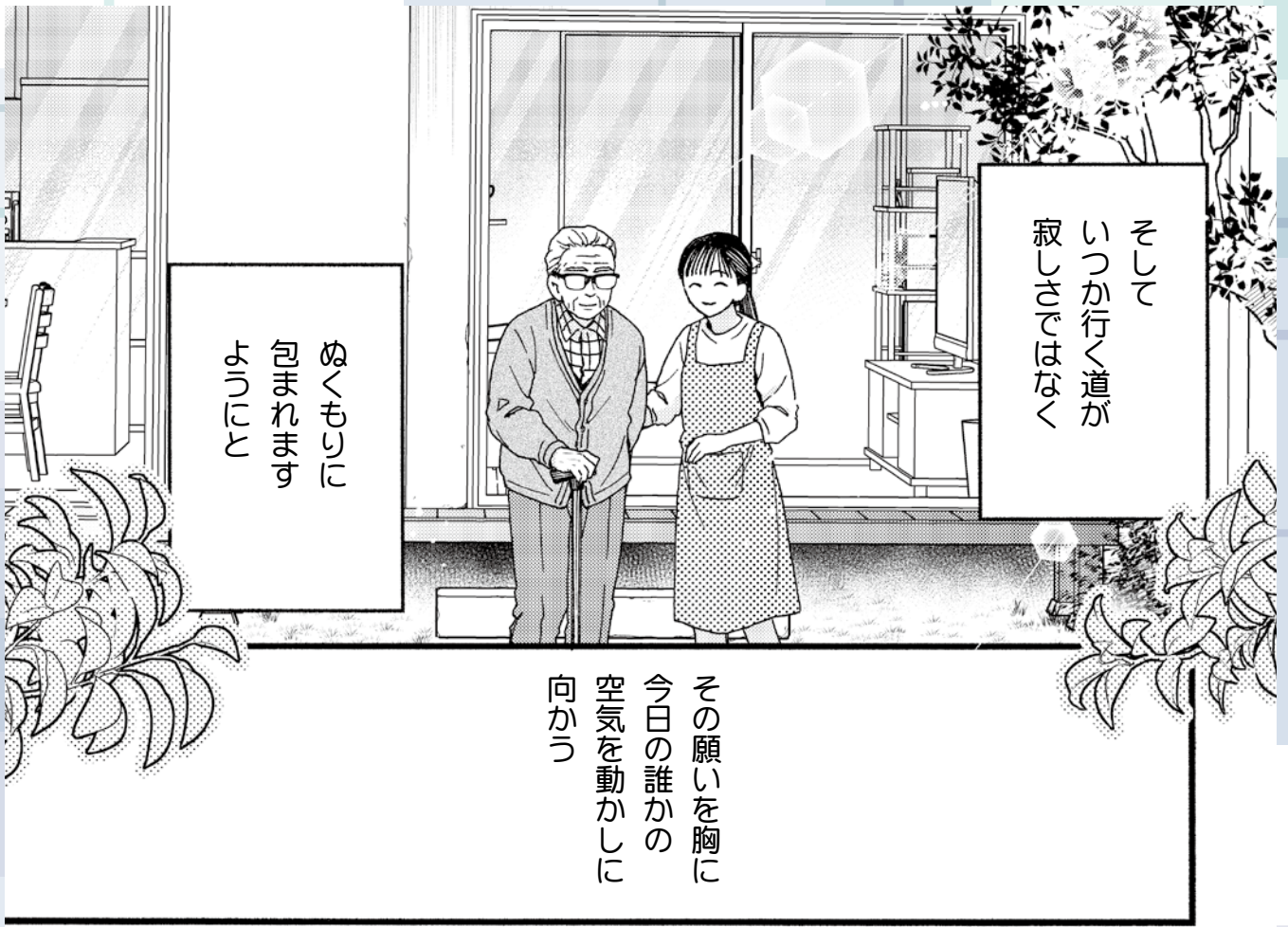


歳を重ねると
言うことは
私たちもいつか行く道

その道が
孤独と寒さに
覆われたものに
ならないように

その願いを込めて
仲間とともに
この事業を立ち上げた

ご利用者様も
介護に携わる者も
共に「佳き歳月を
重ねていく」



そして
いつか行く道が
寂しさではなく

ぬくもりに
包まれます
その

その願いを胸に
今日の誰かの
空気を動かしに
向かう

やまなし介護感動ストーリー大賞 準グランプリ作品①

「いつか行く道」

刃刀千秋さん

訪問時間の十分前、甲府の朝は冷え込みが厳しく、白く浮かんだ息を吐きながら玄関前に立った。静まり返った家の扉を開けると、鬼の形相で階段に座る姿が飛び込んできた。「どうされたんですか。」声をかけ、手を握ると、その手は芯まで冷え切っていた。

「でももうもえないよ。」不機嫌そうに返されたが、手は弱々しくも握り返された。都内の病院を長年勤め上げ、定年後すぐ最愛の奥様を亡くし、故郷の甲府で一人暮らしを続けている。「君が来なければ、この家の空気は動かないんだ。」その言葉は胸の奥深くに突き刺さった。誰かの存在が、空気を動かし、命を温

める。そんな当たり前のようできて、切実な現実がそこにあった。

背中を丸め、両手で包み込むようにして汁椀をすすむ姿。その姿には、与えられた命を丁寧に全うしようとする、静かで力強い意思が宿っていた。歳を重ねると言うことは、私たちがいつか行く道。その道が孤独と寒さに覆われたものにならないように、その願いを込めて、仲間とともに、この事業を立ち上げた。

ご利用者様も、介護に携わる者も、共に「佳き歳月を重ねていく」そして、いつか行く道が、寂しさではなく、ぬくもりに包まれますように。その願いを胸に、今日の誰かの空気を動かしに向かう。